

河童の絵で有名な日本画家

牛久沼の畔^{ほとり}にあるアトリエ兼住宅への道順は、一口では説明がつかないほど複雑である。幸いなことに、細い道筋の角ごとに石の道標がある。それを頼りに進むと、湖畔の林にたどり着く。右手に「河童の碑」、左手に「雲魚亭」がある。

雲魚亭は「河童」の絵で有名な日本画家、小川芋銭(1868—1938)の住まい兼アトリエである。亡くなる一年前に自邸内に造った。現在は「小川芋銭記念館」となっている。

小川芋銭(以下芋銭)は、慶応四年・明治元年(1868)、江戸赤坂溜池にあった牛久藩邸で父伝右衛門賢勝、母栄の長男として生まれた。父は同藩の大目付役であった。時代の転換期、廃藩置県によって、一家は牛久県庁跡の新治県城中村(現牛久市城中町)に移ることになった。

城中で小川家は、農家となった。芋銭は隣村の牛久学舎(在学中に「牛久小学校」と改称)に入学。卒業後、上京し、親戚筋にあたる藤屋小間物店で働くことになった。この間、一年弱、近くの桜田小学校尋常科第三級後期

に通った。

画業への道は明治14年(1881)、東京府牛込区(現東京都新宿区)にあった画塾彰技堂に入ってからである。この時期、芋銭は、徹夜して習作に励み、絵の才能を開花させていった。しかし、同塾卒業後は再び、藤屋小間物店に戻った。

父は、芋銭が絵に熱中することを認めなかった。しかし、寸暇を惜しんで絵に没頭する芋銭を見かねて、在京の親戚筋が動き出した。

藤屋小間物店の遠縁に改進黨政治家で、後に「憲政の神様」と呼ばれた尾崎行雄がいた。尾崎から知り合いの「朝野新聞」に就職の口添えを頼み込んだのである。

こうして芋銭は、「朝野新聞」に初めての働き口を得た。客員という立場ながら、同社は芋銭の絵を認め、紙面でスケッチ画の連載をするまでになった。そんな折、父が隠居届を出した。芋銭は牛久の実家を相続することになり、妻も娶った。

妻さい(後に「こう」と改名)の助けもあり、

小川 芋 銭

Ogawa Usen

芋銭は農業の傍ら絵を描いた。その絵を県内の新聞社に送った。最初は『茨城日報』(昭和初期に廃刊)。次いで『いはらき』(現茨城新聞)。この頃から「芋銭」の号を用いていたようだ。

なかでも「いはらき」の著名文士、佐藤秋蘋、田岡嶺雲との出会いは、その後の芋銭に影響を与えた。秋蘋の紹介で『平民新聞』にも寄稿。この頃の絵は漫画で、社会風刺画に交じって河童の絵もあった。

芋銭を知る童謡詩人、野口雨情は『小川芋銭・回想と研究』の中で、芋銭を訪ねた時の様子を語っている。

「先生のお宅は沼の辺りの農家のようで、奥さんも畑の仕事からあがってこられた。「牛久で泊まった時、河童の話などしてよけいに印象をつよめた」と。

また、雨情は別な頁で「いはらき」の記者の話として載せている。芋銭を画家と知らなかった雨情に対し、その記者は「いや、画家です。昨夕も大工町へ行って酒に酔って、芸者

のハンカチやいろいろなものへ河童を描いた。河童は天下一品です」(文中敬称略)。

主な参考文献

『小川芋銭・回想と研究』(館澤冊子編、昭和63年、古美術妙童湯島店発行)。『牛久が生んだ画人 小川芋銭』(小川芋銭生誕120年記念祭実行委員会編、平成元年、牛久市発行)等。



雲魚亭から程近い場所に建てられた「河童の碑」
=牛久市城中町(筆者撮影)

歴史ジャーナリスト

茨城県郷土文化研究会 会長
ヒタチノデザイン研究所 所長

富山章一

偉人から読み解く「親戚力」のヒント